

学習指導要領の「内容」の(2)エの「国際的な要素をもった文化」、(4)アの「戦国の動乱とその時局のヨーロッパ人の来航について理解させる」に示す内容を学習指導要領に示していない内容として設けており、不適切である。

マルコポーロが『東方見聞録』を執筆したように誤解するおそれのある表現である。

ワールド・World challenger 完結

チャレンジャー

「香料諸島」をめざす人々

東南アジアには、「香料諸島」とよばれたクローブ、ナツメグを生産する小さな島々があります。香料はアラブの商人や中国人にとっては「身体を温め、食べすぎ、胃のもたれをとり…」と、薬としての効能に価値がおかれ、古くから大切な交易品となっていました。その後、イタリアのマルコポーロが記した『東方見聞録』で香料が紹介されると、ヨーロッパ人もおしよせてくるようになりました。香料を好むヨーロッパ人にとって、香料は「金」と同じように貴重なものでした。16世紀初め、マゼランが航海でめざしたのは香料の宝庫「モルッカ諸島」でした。



クローブ



アラブの商人をのせたダウ船

三角帆を張ったくさくさい木造の「ダウ船」は、紀元前にインド洋で生まれ、季節風に乗って東南アジアから中国までの交易に活躍しました。現在でもアラビア海やペルシャ湾などで貿易活動はつづけられており二千年あまりの歴史をまもっています。



奈良時代にすでに伝わっていた香料

8世紀、聖武天皇の愛用品などを納めた正倉院のなかからは、コショウやクローブなども発見されています。ということは何らかのルートを通じて、東南アジアの香料がすでに日本にも伝わっていたこととなります。もちろん貴重品だったことは明らかです。

代表的な香辛料



【クローブ】



【ナツメグ】(左:実、右:種子)

香辛料をめぐるヨーロッパ諸国の争い

地図の右下の方にモルッカ諸島やバング諸島があります。島々が大きくえがかれており、重要な地域となっていたことがわかります。現在の国境ともがっている部分もいろいろみられます。なお、17世紀以降この島々をめぐるヨーロッパ諸国のはげしい争いがおこっていました。



モルッカ諸島

バング諸島

(発展的な学習内容ではなく、本文の学習として扱うように改訂しました。)

ワールド・World challenger

チャレンジャー

「香料諸島」をめざす人々

東南アジアには、コショウやクローブなどの香料(香辛料)を生産する小さな島々があり、「香料諸島」とよばれていました。香料は、アラブの商人や中国人にとって、「身体を温め、胃のもたれをとり…」というように薬としての効能に価値がおかれ、古くから大切な交易品となっていました。

13世紀末にアジアを旅したイタリアの商人マルコポーロの体験が記された『東方見聞録』で、香料の産地が紹介されると、ヨーロッパの人々もアジアをめざすようになりました。香料を好むヨーロッパの人々にとって、香料は「金」と同じように貴重なものだったのです。香料諸島をめざす航海への挑戦が、大航海時代への幕開けとなりました。



マルコポーロ



アラブの商人を乗せた「ダウ船」

三角の帆を張った、くさくさい木造のダウ船は、紀元前にインド洋で生まれ、季節風に乗って東南アジアから中国にかけての交易に活躍しました。現在も、アラビア海やペルシャ湾などで貿易活動はつづけられ、二千年あまりの歴史をまもっています。



日本にも伝わっていた香料

8世紀に聖武天皇の愛用品などを納めた正倉院には、コショウやクローブなども発見されていました。すでに奈良時代には、なんらかのルートにより、東南アジアの香料が伝わっていたこととなります。

代表的な香辛料



①コショウ



②クローブ



③ナツメグ(左:実、右:種子)

16世紀初めに、マゼランが航海でめざしたのは、香料の宝庫「モルッカ(マスカ)諸島」でした。当時の地図を見ると、これらの島々は相対的に大きくえがかれており、重要な地域とされていたことがわかります。

モルッカ諸島には、16世紀にポルトガルが、17世紀にオランダがあいついで進出するなど、香料の貿易の権利などをめぐって、ヨーロッパ諸国によるはげしい争いがありました。

現在の国境とちがいを比べてみよう。



モルッカ(マスカ)諸島

番号20の関連修正、もくじ

(番号20の修正に合わせて、もくじを修正しました。)

世界の古代文明と大航海の巻	36
香料諸島をめざす人々	62
大航海を断る鎖国、海洋をつなぐ通商	142

「香料諸島」をめざす人々